

英語の授業を活気づけるアクティビティー —中学校1年生で習う文法編—

磯 野 徹

要 旨

授業構成法（英語）の科目を担当するようになり、今年で4年が経った。科目名称からわかるように、この科目は教職課程を履修している学生が中学・高校における英語授業の「構成法」を勉強することを目的としたものである。履修者は主に国際コミュニケーション学部と文学部の2、3年生ということもあり、塾等での教師経験のある学生は何人かいるものの、多くの履修学生は当然のことながら人前で授業をするにはまだまだ不慣れである。その為、この科目では、私と担当グループの学生数名が授業方法に関してあらかじめ綿密な打ち合わせをし、それをもとに学生が模擬授業を行い、生徒役となった学生はその模擬授業に関するレポートを提出する、という形式で進めている。90分の授業の中で多いときには3グループが順に模擬授業を行うため、発表された授業案は4年間で100を超えた。それらの中で、今回は、中学校1年生対象の授業で今すぐに使えそうな授業アクティビティーを4つ紹介していく。

キーワード：授業構成法（英語）、中学校1年生の英語授業、授業の工夫、疑問文と否定文、疑問詞、現在進行形、文法ワーク

1. 授業構成法（英語）の講義を通して

教師それぞれに理想とする授業はあると思うが、私個人は、授業中に学生が腕時計を見た

時に、「あれ、もうこんな時間か。もうあと10分で授業終わりなんだ」というくらい、時間の流れが速い授業を行いたいと思っている。そのような授業をする為に、まず頭を悩ますのが、授業進行が単調になってきた時に、どのようなアクティビティーを導入して、授業を再活性化させるか、といった授業の構成案である。なかにはそのようなものに頼らずとも、自分のキャラを前面に出して授業を活性化させることができる教員もいるが、それは全ての教員が出来ることではないし、経験も必要とする。逆に、上記のような授業の構成さえしっかりとしていれば、まだ経験の浅い教員でも何とか授業を成立させることができるだろう。よって、大学と中学・高校では授業時間が大きく異なるため導入できる度合いに差はあるものの、いつどのようなアクティビティーを取り入れるかを思案することは授業を上手に構成する為の第一歩である、という点に関しては両者に共通していることだと考える。

そのような理由から、この科目では、毎回担当者が与えられたテーマに沿った模擬授業を行う形式で進めているが、その最大の目標を、英語が嫌いな生徒も興味を持ち、そしてクラス全体が授業に参加するような授業アクティビティーを披露することにおいている。そのために、模擬授業担当グループはあらかじめ中学・高校で実際に使用されている教科書を手渡され、授業案を仲間同士で考え、担当教員である私と授業案に関して事前ミーティングを行うことを義務付けられている。皆一生懸命考えてくるのだが、多くの場合は最初から練り直しとなり、私からのアドバイス・アイデアをもとにその場の全員で意見を出し合いながら授業案を考えることになる。その後、レジュメ・ワークシートの作成をし、晴れて模擬授業に臨むことになる。各グループに与えられる時間は、「授業の目的、手順を紹介するイントロダクション」、「教員役の学生による模擬授業」、「授業後の質疑応答」等すべてをあわせて25分くらいであり、実際に模擬授業をやっている時間は10分から15分くらいである。これは、履修者が多く、このくらいでまわしていかないと全員に教員役がまわらないという事情もあるのだが、それよりも、自分独自に考えたアクティビティーを実際に中学・高校の短い授業時間で行おうとすれば、それに割ける時間は数分がいいところであろう、という実情を考慮したものである。

先に述べたように、模擬授業は様々なテーマにそって行われているが、第1回目である今回は、中学校1年生で習う文法事項に関するアクティビティーを紹介していこうと思う。

2. 中学校1年生で習う文法事項

東京書籍発行のNEW HORIZONの場合、中学校1年生で習う主な文法事項は、「be動詞」、「一般動詞」、「疑問文と否定文」、「疑問詞」、「三人称単数現在」、「代名詞」、「現在進行形」、「助動詞のcan」、「一般動詞の過去形」である。今回はこの中から、「疑問文と否定文」、「疑

問詞]、「現在進行形」]、「助動詞のcan」]の文法項目を取り扱う授業を行う際に役立つアクティビティーをそれぞれ紹介していくことにする。全てのアクティビティーに共通して言えることは、何回も発言の機会を与えて表現の定着を図る、もしくは教科書に載っている文をただ繰り返すだけでなく自発的な発言を促すことを目的としている。

3. 疑問文・否定文の学習 — 動物当てゲーム¹⁾

この文法事項は、NEW HORIZONでは、Unit 2と3で取り扱われ、「be動詞」の場合は倒置や“not”をつけ、「一般動詞」の場合は“Do”を使って表現することを習う。日本語にはないこのような動詞の区別は、英語を学習し始めたばかりの生徒がまず躓くところではないだろうか。

[準備]

うさぎ・きりん・へび・ぞう、の4種類の動物の絵が描いてあるカードをつくる。後にペア活動で使うので、30人のクラスと仮定した場合、15組×4種類の動物×2セットで、おおよそ120枚ものカードが必要になるが、カード作成はコピーした動物の絵をカード状に切った画用紙に貼っていけばいいだけなので、それほど大変な作業ではないだろう。

[指導]

- (1) 疑問文・否定文の説明が終わった後、上記の動物が描かれたカード（ペアワーク用に作成したものよりも大きなもの）を教員は順次自分の顔の横に出し、“Do I have a long ear?”, “Do I have a long neck?”, “Do I have a long body?”, “Do I have a long nose?”等、生徒に問い、あわせてそのフレーズを板書する。“neck”や“nose”等、この時点ではまだ難しい単語が出てきてしまうが、教師が自分の体のその箇所を指しながら言えば、どこを指している単語なのか理解できるだろう。教師のその問いに対し、あっていれば“Yes, you have.”、間違っていれば“No, you do not.”で答えるよう生徒には指導する。
- (2) 次に、生徒を二人一組のペアにし、準備したカードをそれぞれ配る。それぞれのペアに配られるカードは、4種類の動物×2セットで、合計8枚である。そのカードを裏返しにし、よくシャッフルするよう指導する。
- (3) 各ペアのワーク内容は次の通りである。まずAさんが上から一枚とり、それをオデコのところにあてる。この時点で、Aさんは自分が何の動物のカードを持っているかわからないが、ペアになっているBさんには見えている。そこで、Aさんは自分が何のカードを持っているのか予測し、上記の指導(1)で提示された疑問文を使用してBさんに問うこと

になる。あっていたら、Bさんは“Yes, you have.”と答え、A：“Am I a rabbit?” B：“Yes, you are.”等と続ける。そして今度はBさんが新たな一枚を取り、Aさんに質問する番となる。あっていなかった場合は、Bさんは“No, you do not.”と答え、Aさんは当たるまで質問を繰り返すことになる。

上記の作業を、どこのペアが一番早くできたか競争させてもいいかもしれない。ただその場合、狙いである疑問文・否定文の部分を省略して、“long ear?”とか“Yes.”だけで済ましてしまうペアも出てくるのが予想されるので、そこらへんはきちんと事前指導し、机間巡視をすることで防ぎたい。

4. 疑問詞“Where”と場所を表す前置詞の学習²⁾

疑問詞は、NEW HORIZONの場合、Unit 4で“What”が登場し、それ以降、Unit 8にかけて、“How”, “Which”, “Who”, “Where”が続々と登場してくる。特に“Where”は場所を表す前置詞も同時に登場してくるので、疑問詞とあわせてそれらもしっかりと身につけさせる必要がある。前置詞が示す場所のイメージは、実際に絵を見ながらやると効果的なので、今回は絵のインフォメーション・ギャブを用いたワークを紹介する。

[準備]

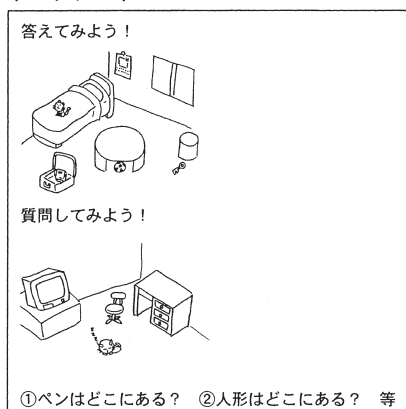
人形を1体。あとは次ページに載せたような対になっているワークシートを人数分。これは実際に発表した生徒が作成したものであるが、よく見てもらえばわかるように、上半分の絵の場合、ワークシートAの絵の中のいくつかのもの（例：ネコ、本、サッカーボール等）がワークシートBの絵の中には描かれていない。逆に、下半分の絵の場合、今度はワークシートBの絵の中のいくつかのもの（例：ペン、人形、ラジオ等）がワークシートAの絵の中には描かれていない。

[指導]

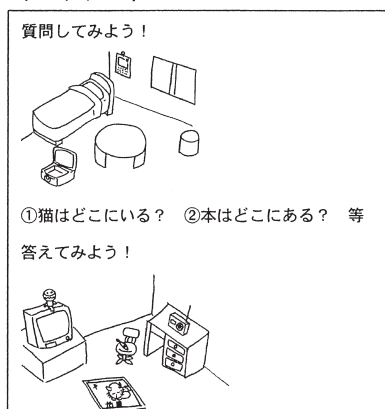
- (1) 教科書の内容を一通り終えた後、教師が人形を取り出す。例えば、アンパンマンのヌイグルミを用いた場合、それを机の上に乗せて、“Where is ANPAN-MAN?”と生徒に聞き、“He is on the desk.”というように答えさせる。同じように、机の下、横、箱の中等に人形を移動させ、“under”, “by”, “in”等の習得を確認する。
- (2) 次に、二人一組にして、上記のワークシートA & Bを各ペアに配布する。上記で説明したように、それぞれの絵には情報量の差があるので、前半はシートBを配布された生徒が

英語の授業を活気づけるアクティビティー

ワークシート A



ワークシート B



“Where”を使って、シートAを配布された生徒に指示されたものがどこにあるかを質問し、質問された生徒は先に習った前置詞を用いながら答えを伝えることになる。その答えを聞いた生徒は自分のワークシートにその絵を描く、という流れである。後半は、今度は質問する人と答える生徒が入れ替わる。

- (3) すべての作業が終わったら、お互い絵を見せ合い、正しい場所に指示されたものが描かれているかを確認しあう。

作業を通して、役割を交代しながら、“Where”を用いた疑問文と前置詞を用いた文を何度も使うことになるので、ペアワークを楽しみながら重要な文法項目を効果的に習得できるワークである。

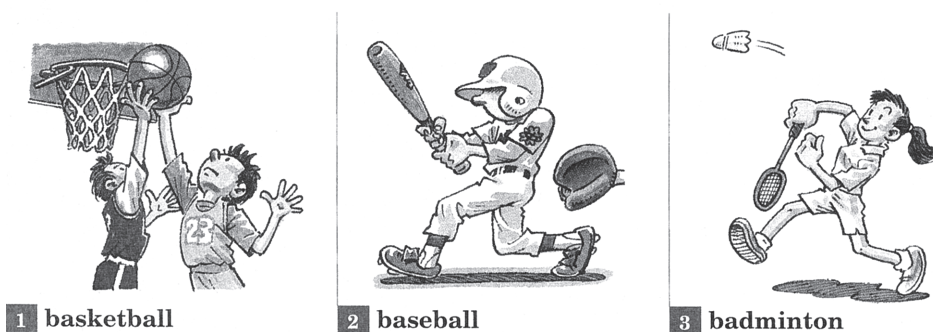
5. 現在進行形の学習 — ジェスチャーゲームを通して³⁾

1年生の後半から時制関連の文法事項が導入され始め、その1番手として、NEW HORIZONでは、Unit 9で現在進行形が登場する。これまでに習った現在形との対比で、「今まさにその動作・行為の真最中」という状態を表す時制であることを認識させながら、表現の定着を図りたい。その為、実際にジェスチャーをしながら行う下記のようなジェスチャーゲームは現在進行形の学習に最適である。

[準備]

様々なスポーツをしている絵が貼られたカードを作成する。スポーツの選択に関しては、対象が中学校1年生であることを考えると、全て“play”で言えるものの方がいいであろう

(例/baseball, football, tennis, rugby, basketball, volleyball, badminton, handball等)。幸いなことに、NEW HORIZONには巻末のTool Boxに、「部活動」として様々なスポーツをしている下のよ
うな絵が載っているので、これを利用すれば比較的簡単に作成できる。これらを1セットと
し、必要となるグループ数分作成する。



(NEW HORIZON, English Course 1, p. 124)

[指導]

- (1) 現在進行形の説明を終えた後、生徒を4人1組のグループに分け、各グループに上記で作成したスポーツカード1セットを配る。
- (2) 1人が他のメンバーに見えないようにカードをめくり、“What am I doing?”と質問しながら、そのスポーツをしているジェスチャーをする。
- (3) 質問された他の3人は、わかった時点で“You are playing baseball.”等、答えを言う。
- (4) 当たったら、時計回りで役割交代をしながら進めて行き、一番早く終わらせたグループの勝利。

先にも述べたが、ゲームに熱中してくると、狙いである進行形の表現を省略して、“baseball!!”, “tennis!!”等、単語だけで進めるグループが必ず出てくるので、事前指導と机間巡視をしつかりする必要がある。また、上記のワークが簡単すぎると感じた場合は、スポーツという縛りを外し、教科書に出てくる表現を用いたジェスチャーゲームをすると、意外に難しく、そして盛り上がる(例/listening to music, running, studying, reading books等)。

6. 疑問詞と助動詞“can”の習得 — インディアンポーカー風推測ゲーム⁴⁾

先に述べたように、NEW HORIZONではUnit 4から疑問詞が扱われはじめ、Unit 10で助

動詞“can”とともに登場する“When”で一段落するためなのか、いわゆる“5W1H”の復習にもページが割かれている。そして、これもやはり“When”が登場したためなのか、「月日」の表現もこのUnitであわせて取り扱われている。ここではその“When”と「月日」、そして中学校1年生で習う疑問詞表現の中では難しい部類に入るであろう、“What color ~?”, “How big ~?”という、「疑問詞+名詞or形容詞」の復習に最適なワークを紹介する。

[準備]

様々な果物の絵が貼られたカードを用意する。現在進行形の時と同じように、これに関してもNEW HORIZONの巻末TOOL BOXに様々な果物や野菜の絵が載っているので、それを利用する手もある。ただし、今回の場合は色も重要になってくるので、カラーコピーを使用するか、コピー後教師が色を塗る必要がある。ちなみに、発表時に選んだ果物は、赤系から“Apple”, “Strawberry”, “Cherry”, 黄色系から“Banana”, “Lemon”, “Pineapple”, 緑系から“Melon”, “Watermelon”の8種類であった。これを1セットとして、それをグループ数分用意する。

[指導]

- (1) 「疑問詞」の復習、「月日」の説明まで終わった後、これから使う表現に関してもう一度練習する。それらは、今回の場合、1. “What color is it?” に対して “Red”, “Yellow”, “Green”; 2. “How big is it?” に対して “Big”, “Small”; 3. “When can you eat it?” に対して先ほど習った “In January” ~ “In December” という感じになる。そして、上記に挙げた果物の読み方もあわせて練習できれば万全である。
- (2) 生徒を4人1組くらいに分け、準備してきた果物カードを各グループに裏向きに配布する。ここからは先に紹介した「動物当てゲーム」とほぼ同じ流れで進めることになる。1人がカードを取り、それを額に当て、自分はそれに何の果物が描かれているかは見えないが、他の3人には見える状況を作り出す。そして先に練習した表現を使いながら他のメンバーに質問し、その答えを参考に自分が額にあてているカードにはどんな果物が描かれているか推測し、あてていくのである。
- (3) 1人が終わったら、時計回りに役割交代をしながら進めて行き、最終的に正解した数が1番多かったグループ、もしくは1番早かったグループの優勝となる。

実際にやってみると、3番目の質問 “When can you eat it?” に月で答えるのが意外と難しいのが判る。“Spring”, “Summer”等の季節でなら比較的簡単なのだが、中学校1年生の段階ではこれらの単語はまた未修得なので、事前にその果物を食べられる月の情報もあわせて与

えておいたほうがいいであろう。

7. おわりに

今回は、今までの模擬授業案の中から、中学校1年生で習う文法項目とあわせて行うのに適した4つのアクティビティーを紹介した。今回のレポートで、授業構成法の授業では今回のようなゲーム形式のアクティビティーばかりを取り扱っているのか、と思われた方もいるかもしれない。実際、そのようなものが割合として多いのは確かだが、その他にも、新出単語の提示法や効果的なパラグラフ・リーディングの指導法等も授業ではテーマとして取り扱っている。今後機会があれば、中学校2年生から順次対象学年を上げながらそれらもあわせて紹介していきたいと思う。

注

- 1) これは、2006年度の授業で、石川めぐみさんと青井望美さんによって発表されたものを、ペア活動でできるよう修正して紹介したものである。
- 2) この授業案は、2007年度の授業で、久保谷亮太君、国枝孝彦君、賀村佳典君によって発表された。
- 3) この授業案は、2008年度の授業で、藤田康祐君と仮屋翔太君によって発表された。
- 4) この授業案は、2009年度の授業で、清水大介君、船橋大輝君、青木龍一君によって発表された。

参考図書

NEW HORIZON English Course 1, 東京書籍, 2006.